

10 植物・動物・生態系

10.1 調査

(1) 植物

ア 植物相

ア) 調査事項

調査地域に生育する種子植物及びシダ植物の種名及び分布状況とした。

イ) 調査範囲

実施区域内及びその境界から500mの範囲とした。調査範囲は、図5-2-1-10-1に示すとおりである。

ウ) 調査方法

既存資料調査及び現地調査により行った。

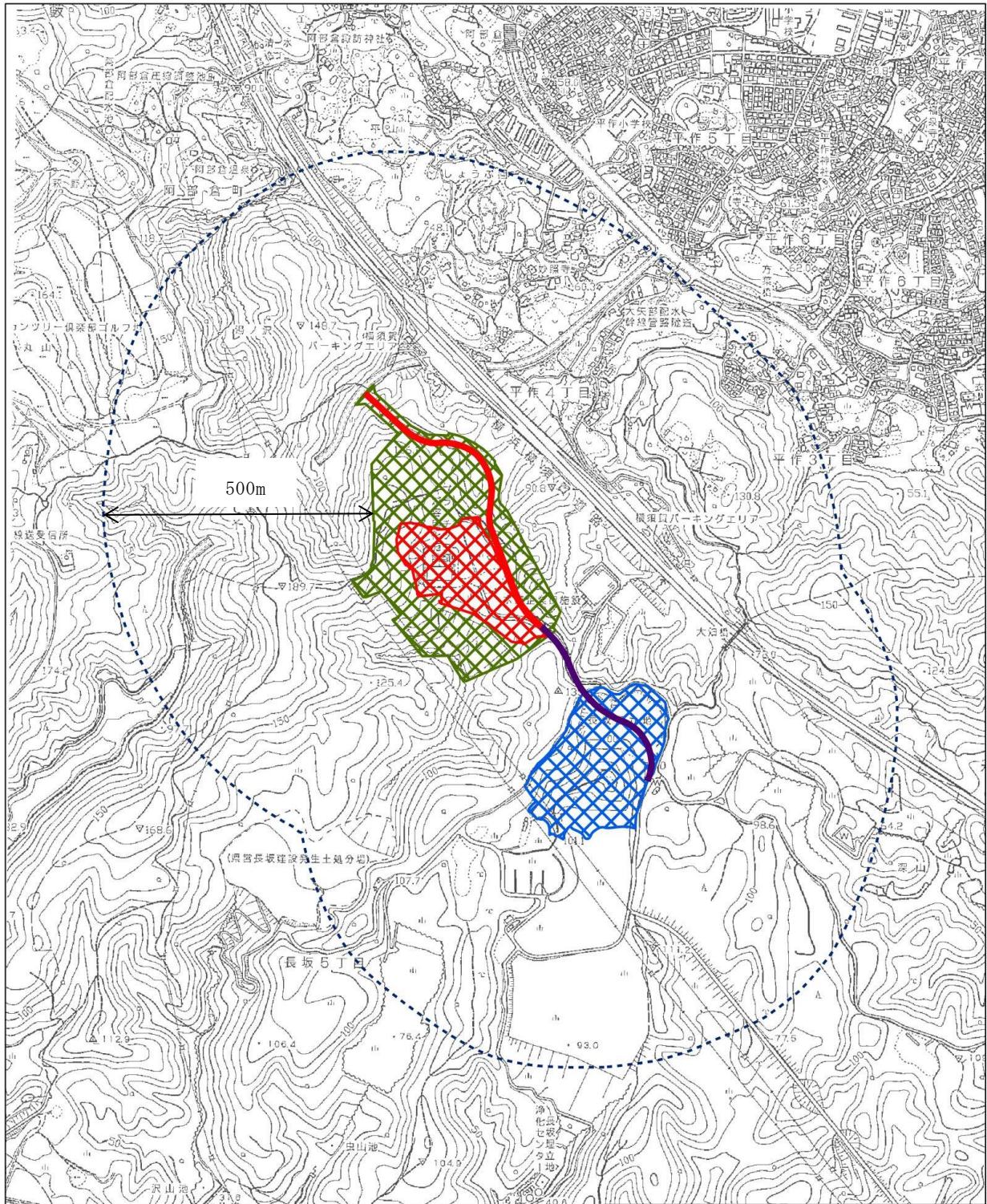
a 既存資料調査

横須賀市及びその周辺に生育する植物について既存資料の収集・整理を行い、記録のある生育確認種を整理し、あわせて表5-2-1-10-12 (P. 380) に基づき、重要な種について抽出した。

収集した既存資料は、表5-2-1-10-1に示すとおりである。

表 5-2-1-10-1 植物既存資料一覧

番号	資料名	発行者	発行年
①	「みどりのたより No. 2」	環境庁自然保護局	昭和60年
②	「地域環境評価書 －三浦半島南部地域－」	神奈川県環境部	平成2年
③	「1990年身近な生き物調査 調査結果」	緑の国勢調査協力会	平成4年
④	「横須賀市芦名地区産業廃棄物 最終処分場建設事業 環境影響予測評価書 資料編」	神奈川県	平成12年
⑤	「Y-HEART計画基盤整備事業 環境影響予測評価書 資料編」	西武鉄道株式会社	平成14年
⑥	「神奈川県レッドデータ生物調査 報告書2006」	神奈川県立生命の星・地球博物館	平成18年
⑦	「平成23年度 かながわ環境整備 センター 環境保全対策（動物・植物）等 業務委託報告書」	神奈川県環境農政局 U-Landscaps Design株式会社	平成24年



<p>凡例</p> <ul style="list-style-type: none"> : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む) : 宅地の造成 (残置森林(最大範囲)) : 発生土処分場 : 調査範囲 : 新設搬入道路 : 既設改修道路 	<p>注) 宅地の造成(残置森林(最大範囲))には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。</p>
<p>図 5-2-1-10-1 調査範囲(植物)</p>	

b) 現地調査

現地調査の調査内容は、表5-2-1-10-2に示すとおりである。

表5-2-1-10-2 植物現地調査内容

調査項目	調査時期・回数
植物相	夏、秋、早春、春：各1回

a) 調査方法

調査範囲を踏査して、目視により確認した植物を記録し、重要な植物が確認された場合には、種名、個体数、確認地点及び生育状況を記録した。踏査ルートは、調査範囲の植物相を把握できるように、多様な環境を含むようにした。現場で同定できない植物については、個体を採取して標本を作製した。

b) 調査地点

調査地点は、図5-2-1-10-2に示すとおりである。

c) 調査期間及び調査期日

調査時期及び調査期日は、表5-2-1-10-3に示すとおりである。

表5-2-1-10-3 調査時期及び調査期日

調査項目	調査時期	調査期日
植物相	夏季	平成24年 8月13日～15日
	秋季	平成24年10月15日～17日
		平成24年10月24日～25日 平成24年11月 8日～ 9日
	早春季	平成25年 4月 3日～ 5日
春季	平成25年 4月30日～ 5月2日	

エ) 調査結果

a 既存資料調査

既存資料調査により確認された分類群別の確認種の概要は、表5-2-1-10-4に示すとおりである。

横須賀市周辺において生育が確認された植物種は、133科811種であり、このうち表5-2-1-10-12 (P. 380) の選定基準に該当する重要な種は43科127種であった。

表5-2-1-10-4 既存資料調査等による植物分類群別の生育確認科・種数

分類群				合計		重要な種	
				科数	種数	種数	主な種名
シダ植物門				18	68	15	コヒロハハナヤスリ、キジノオシダ、タニイヌワラビ等
種子植物門	裸子植物亜門			7	10	3	イブキ、ハイネズ、ネズ
	被子植物亜門	双子葉植物綱	離弁花亜綱	64	319	23	ハクサンハタザオ、ウメバチソウ、イヌハギ等
			合弁花亜綱	26	200	43	シヤクジョウソウ、イヌノフグリ、ツルギキョウ等
		単子葉植物綱		18	214	43	ミズオオバコ、アマナ、キンラン、クマガイソウ等
合計				133科	811種	127種	—

b 現地調査

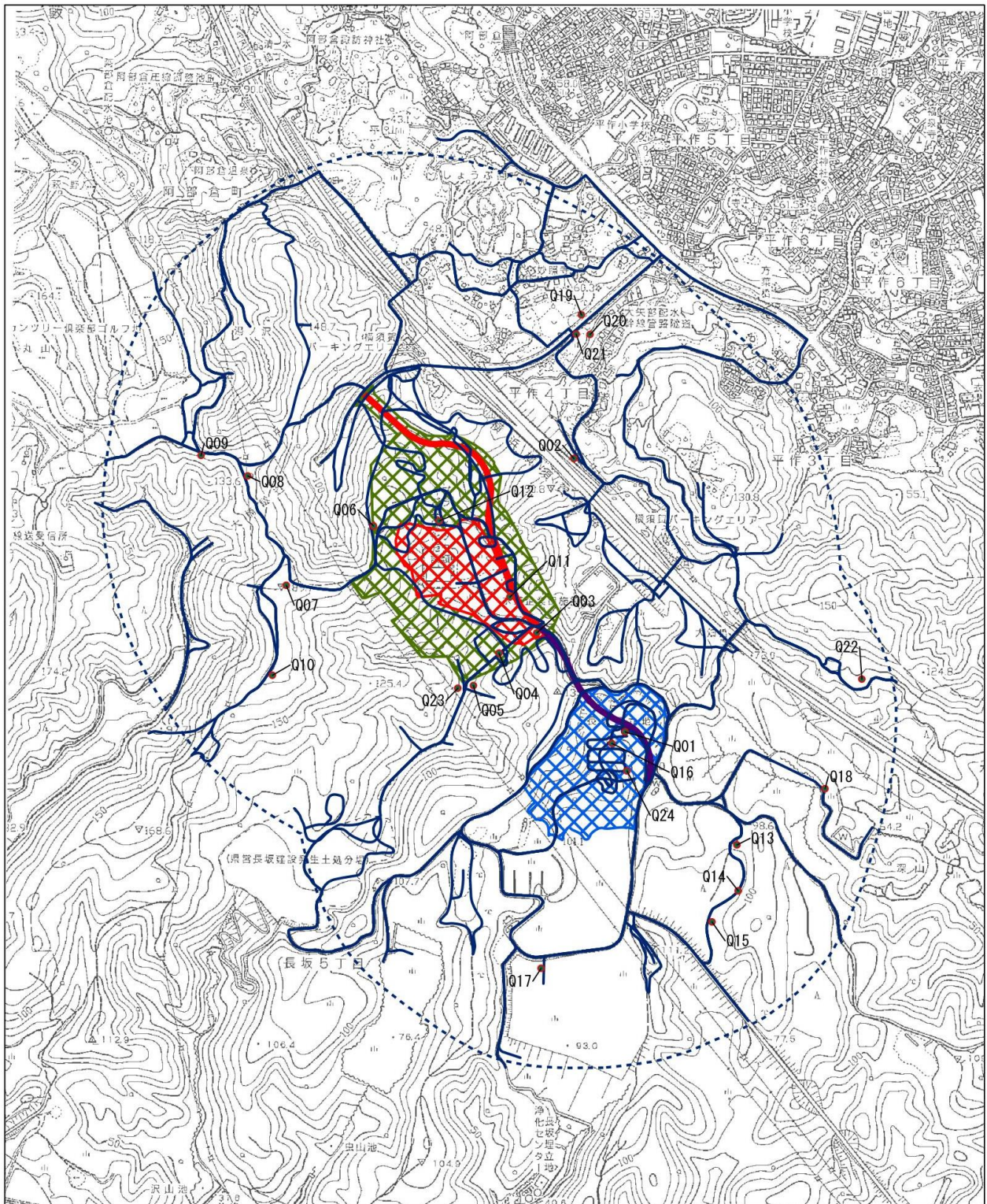
現地調査により確認された植物の分類群別科種数は、表5-2-1-10-5に示すとおりである。

現地調査の結果、合計113科534種の植物種が確認された。分類群別では、シダ植物15科45種、種子植物の裸子植物5科7種、被子植物93科482種であった。

調査範囲は、山地斜面を中心にカラスザンショウ、コナラ、植栽起源のオオシマザクラを中心とした夏緑広葉樹林が広がっており、ミズキ、イヌシデ等の高木も混生していた。また、スタジイやタブノキ、アラカシ等からなる常緑広葉樹林のほか、ケヤキやムクノキ等からなる渓谷林も小面積ながらみられた。林内には、シロダモ、カクレミノ、ヒサカキ、アオキ等の常緑樹や、キツタ、ナガバジャノヒゲ、ヒメカンスゲ等の耐陰性の草本がみられたほか、沢沿いでは、ヤマネコノメソウ、イワボタン、ウワバミソウ、ニリンソウ等の好湿性の草本がみられた。また、林道沿いや林縁などでは、ツクバトリカブト、ホタルカズラ、ヒメウズ等の明るい林内に生育する種もみられた。調査範囲北部には耕作地や緑の多い住宅地が広がるほか、調査範囲南部には造成跡地のススキやセイタカアワダチソウ等からなる草地が広がる。これらの人工的な環境では、路傍雑草などを中心としてアブラナ科、アカバナ科、キク科、イネ科などの外来種が多く確認されたほか、管理が放棄された場所ではアズマネザサやクズの繁茂がみられた。

表5-2-1-10-5 現地調査による分類群別の生育確認科・種数

分類群		調査時期				調査範囲			合計				
		夏季	秋季	早春季	春季	実施区域			周辺	科数	種数		
						廃棄物 処理施設	宅地の 造成	発生土 処分場					
シダ植物門		30	30	26	32	29	30	24	38	15	45		
種子 植物門	裸子植物亜門	4	6	2	3	5	2	2	6	5	7		
	被子植物 亜門	双子葉 植物綱	離弁花 亜綱	161	157	126	166	143	120	128	220	56	241
			合弁花 亜綱	72	88	62	77	83	63	66	106	25	125
		単子葉植物綱	63	72	41	60	75	49	52	96	12	116	
合計		330種	353種	257種	338種	335種	264種	272種	466種	113科	534種		



<p>凡例</p> <ul style="list-style-type: none"> : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む) : 宅地の造成 (残置森林(最大範囲)) : 発生土処分場 : 調査範囲 : 新設搬入道路 : 既設改修道路 	<ul style="list-style-type: none"> : コドラート調査地点 : 踏査ルート
--	--

注) 宅地の造成(残置森林(最大範囲))には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。



図 5-2-1-10-2 調査地点(植物)

ア 植生

ア) 調査事項

調査事項は、以下に示すとおりとした。

- a 現存植生
- b 群落構造
- c 潜在自然植生

イ) 調査範囲及び地点

現地調査の範囲は、「イ 植物相」と同じ範囲とした。植生調査地点は、図5-2-1-10-2に示すとおりである。

ウ) 調査方法

a 調査期間及び調査期日

調査期間及び調査期日は、表5-2-1-10-6に示すとおりである。

表5-2-1-10-6 調査期間及び調査期日

調査事項	調査時期	調査期日
植生	夏季	平成24年 8月13日～15日
	秋季	平成24年10月15日～17日
		平成24年10月24日～25日 平成24年11月 8日～ 9日
	早春季	平成25年 4月 3日～ 5日
春季	平成25年 4月30日～ 5月2日	

b 調査方法

a) 現存植生

現存植生は、植物社会学的手法（ブラウーンブランケの全推定法）により、現地調査（コドラート調査）を行い、調査範囲の群落単位を決定して植物社会学的な位置づけを明らかにするとともに、航空写真等を参考として現存植生図を作成した。

b) 群落構造

群落構造は、代表的な植物群落ごとに調査区（コドラート）を設定し、調査区内の植物の種類、高さ、胸高直径等を調査し、種構成、階層構造を模式的に図化した群落構造図を作成することにより、植物群落の現況を把握した。

c) 潜在自然植生

潜在自然植生は、代償植生の中に局所的に残存している自然植生（二次林の林床に生育する自然構成種の芽生え・残存木等）の分布と立地条件を確認するものとした。また、既存文献により、調査範囲の潜在自然植生の概要を把握し、資料調査と現地調査の結果から、調査範囲の潜在自然植生図を作成した。

エ) 調査結果

a 現存植生

a) 現存植生の概況

現地調査結果をもとに、調査範囲の現存植生を19類型に区分し、図5-2-1-10-3に示した。各植生区分の概要は、表5-2-1-10-7に示すとおりである。また、群落別の占有面積は、表5-2-1-10-8に示すとおりである。

調査範囲は、三浦半島の中央に位置している。気候帯の区分からみると暖温帯に相当しているため、本来は、スダジイやアラカシ等の照葉樹林が成立する地域であると考えられる。しかし、現在は、人為的影響のある代償植生となっており、コナラやカラスザンショウが優占する二次林や、オオシマザクラやスギの植林、耕作地、住宅地が大部分を占めていた。

調査範囲の山地や丘陵部にみられる植生は、大部分がアカメガシワ-カラスザンショウ群落またはオオシマザクラ植林で占められており、パッチ状にオニシバリ-コナラ群集、スギ植林、シイ・カシ二次林、竹林、ケヤキ群落が分布していた。丘陵部の中でも傾斜が緩やかな場所は、畑雑草群落、水田雑草群落などの耕作地や公園としての利用がなされているほか、調査範囲南部では造成跡地などにススキ群団が成立していた。これらの場所で管理が放棄された箇所は、メダケ群落、アズマネザサ群落、クズ群落などの単調な植生となっていた。

平作川沿いの斜面には、比較的自然度の高いケヤキ群落が小面積で分布しているが、住宅地や耕作地に隣接し低木層にアズマネザサが多く生育することなどから、人為的な攪乱を強く受けている二次林と判断した。

表5-2-1-10-7 調査範囲の植生区分

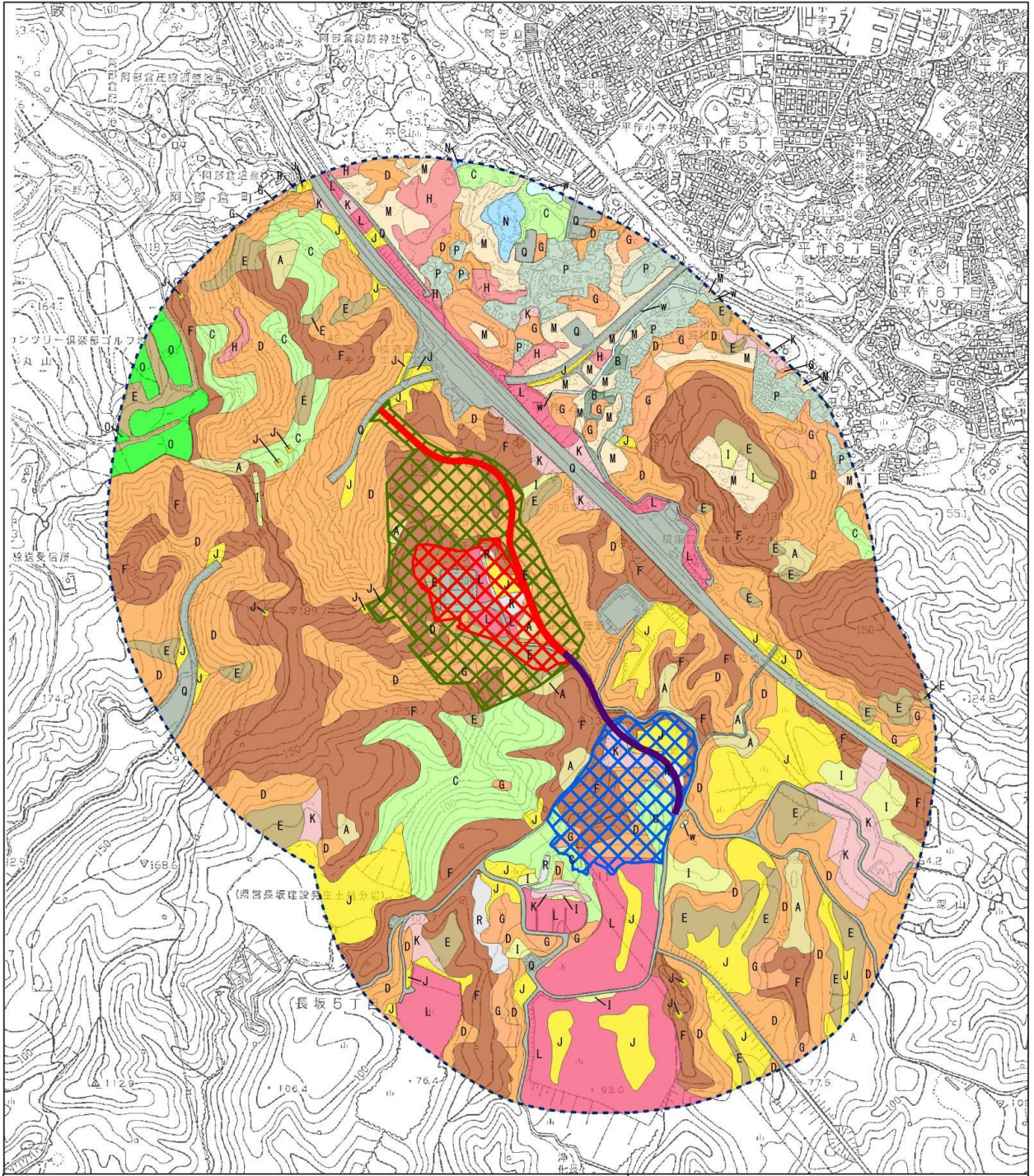
植生区分	概要
シイ・カシ二次林	実施区域内やその周辺の山地や丘陵の斜面や尾根に、断片的に点在して分布する。 群落高9～12m程度の常緑広葉樹二次林である。低木層には、アオキ、ヤブツバキ、タブノキ等が、草本層には、ベニシダ、ナガバジャノヒゲ、ヤブコウジ等がみられる。また、テイカカズラ、キツタ等の常緑のつる植物が見られる。主に残存したスダジイやカシ類が萌芽再生したもので、自然植生に近い群落であると考えられる。
ケヤキ群落	実施区域の周辺の平作川に面した斜面に、小面積で分布する。 群落高12m程度の夏緑広葉樹林である。ムクノキ、ケンボナシ等が混生するほか、低木層にはアオキ、アズマネザサ等がみられる。草本層はヤブラン、リョウメンシダ、ヤマグワ等がみられる。人為的な影響を強く受けている二次林と判断したが、自然植生に近い群落であると考えられる。
オニシバリ-コナラ群集	実施区域内やその周辺の山地や丘陵の尾根筋や緩斜面に、ややまとまって分布する。 群落高10～11m程度の夏緑広葉樹林である。コナラ、ミズキ、オオシマザクラ、シロダモ等が混生するほか、低木層にはアオキ、シロダモ等の常緑樹のほか、イヌビワ、ムラサキシキブ等の夏緑広葉樹が生育する。草本層はベニシダ、ナガバジャノヒゲ、ヤブラン等がみられる。薪炭林、農用林として利用されてきた二次林である。

植生区分	概要
アカメガシワ カラスザンショウ群落	実施区域内やその周辺の山地や丘陵の急傾斜地に広範囲に分布する。 群落高7～8m程度の夏緑広葉樹林で、アカメガシワ、カラスザンショウ、ハゼノキ、ヤマグワなどの先駆性の夏緑広葉樹が混生する。林内は明るく、草本層はコチヂミザサ、ヨモギ、セイタカアワダチソウ等多くの種がみられる。
スギ植林	実施区域内やその周辺の山地や丘陵の斜面下部や谷部の平坦地に、パッチ状に点在して分布する。 群落高8.5～13m程度で、放置された林分においてはシラカシやアカメガシワなどが混生する。低木層にはアオキ、シロダモ等の常緑樹のほか、イヌビワが生育する。草本層はシダ類や常緑広葉樹等の耐陰性の種が生育している。 管理の状況により、林床植生の植被率に差がみられる。
オオシマザクラ植林	実施区域内やその周辺の山地や丘陵の斜面上部から尾根にかけて、広範囲に分布する。 群落高10～11mでの夏緑広葉樹植林で、薪炭材として植栽されたオオシマザクラのほか、シロダモ、コナラ、カラスザンショウ等が混生する。薪炭林として維持管理されてきた人工林で、オニシバリーコナラ群集と種組成的に近似している。
竹林	実施区域内やその周辺の山地や丘陵の斜面下部から中腹にかけて、広くパッチ状に分布している。 群落高10m程度で、低木層にはモウソウチクのほか、ヒサカキ、タブノキ、アオキ等の常緑広葉樹が散生する。草本層はコチヂミザサ、フモトシダ、ベニシダ等がみられるが、植被率は低い。
メダケ群落	実施区域の周辺の平作川近くの耕作放棄地などに、ややまとまって分布する。 群落高6.5m程度でメダケが密生するため、林床は暗く林床植生は極めて乏しい。
アズマネザサ群落	実施区域の周辺の伐採跡地や造成地縁などに、ややまとまって分布する。 群落高は3.5m程度でアズマネザサが密生するため、林床は暗く林床植生は極めて乏しい。
ススキ群団	実施区域内やその周辺の法面や造成地などに、ややまとまって分布する。 草丈1.5m程度の高茎草地で、ススキが高被度で優占するほか、セイタカアワダチソウ、ヨモギ等の高茎草本がみられる。
クズ群落	実施区域内やその周辺の法面や造成地、耕作放棄地などに、ややまとまって分布する。 草丈0.7～1.6m程度の高茎草地で、クズが高被度で優占するほか、セイタカアワダチソウ、ヨモギ等の高茎草本がみられる。
その他植林	実施区域内やその周辺の法面や造成地などに、まとまって分布する。 植生高は5m程度の植林または植栽地で、シラカシ、アラカシ、ウラジロガシ、モッコク、ネズミモチ等の在来の常緑広葉樹種が主に植栽されている。植栽地により生育種は異なる。
畑雑草群落	実施区域の周辺北側の平作川周辺にまとまって分布する。
水田雑草群落	実施区域の周辺北側の『横須賀しょうぶ園』内の湿性草地を、この群落として区分した。
ゴルフ場・芝地	実施区域の周辺北側の丘陵地にまとまって分布する。
緑の多い住宅地	実施区域の周辺の北側から北西部にかけて、まとまって分布する。
市街地	実施区域内やその周辺の道路や構造物をこの区分でまとめた。
造成地	実施区域内やその周辺の平坦地に、小面積で点在して分布する。
開放水域	実施区域の周辺北側の低地に分布する。『横須賀しょうぶ園』に隣接する池と、平作川をこの区分でまとめた。





















表5-2-1-10-8 群落別の占有面積

群落名	調査範囲		実施区域 (廃棄物処理施設)		実施区域 (宅地の造成)		実施区域 (発生土処分場)	
	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)
シイ・カシ二次林	3.77	1.5	0.20	4.5	0.18	1.6	-	-
ケヤキ群落	0.37	0.1	-	-	-	-	-	-
オニシバリーコナラ群集	16.70	6.5	-	-	0.05	0.4	1.14	16.2
アカメガシワ-カラスザンショウ群落	72.10	28.2	0.24	5.5	6.36	54.1	1.29	18.2
スギ植林	12.16	4.8	0.83	19.0	0.42	3.6	-	-
オオシマザクラ植林	56.93	22.3	0.83	19.0	4.33	36.8	2.44	34.5
竹林	8.27	3.2	-	-	0.24	2.1	0.14	2.0
メダケ群落	3.13	1.2	-	-	-	-	-	-
アズマネザサ群落	3.00	1.2	-	-	-	-	-	-
ススキ群団	19.65	7.7	0.34	7.8	0.14	1.2	0.75	10.6
クズ群落	6.15	2.4	-	-	-	-	0.69	9.7
その他植林	15.97	6.2	0.73	16.8	0.00	0.0	0.28	4.0
畑雑草群落	7.88	3.1	-	-	-	-	-	-
水田雑草群落	0.78	0.3	-	-	-	-	-	-
ゴルフ場・芝地	2.86	1.1	-	-	-	-	-	-
緑の多い住宅地	7.42	2.9	-	-	-	-	-	-
市街地	16.98	6.6	0.89	20.4	0.03	0.3	0.18	2.5
造成地	1.26	0.5	0.31	7.2	0.00	0.0	0.16	2.3
開放水域	0.45	0.2	-	-	-	-	0.00	0.0
合計	255.83	100.0	4.36	100.0	11.77	100.0	7.07	100.0

注) 表中の数値は四捨五入しているため、合計値が一致しない場合がある。



凡例

- | | | | | | |
|---|------------------------|---|--------------------------|---|-------------|
|  | ：廃棄物処理施設
(宅地の造成を含む) |  | A : シイ・カシ二次林 |  | K : クズ 群落 |
|  | ：宅地の造成
(残置森林(最大範囲)) |  | B : ケヤキ群落 |  | L : その他植林 |
|  | ：発土処分場 |  | C : オニシバリ・コナラ群落 |  | M : 畑雑草群落 |
|  | ：調査範囲 |  | D : アカメガシワ
カラスザンショウ群落 |  | N : 水田雑草群落 |
|  | ：新設搬入道路 |  | E : スギ植林 |  | O : ゴルフ場・芝地 |
|  | ：既設改修道路 | | F : オオシマザクラ植林 |  | P : 緑の多い住宅地 |
| | | | G : 竹林 |  | Q : 市街地 |
| | | | H : メダケ群落 |  | R : 造成地 |
| | | | I : アズマネザサ群落 |  | w : 開放水域 |
| | | | J : ススキ群団 | | |

注) 宅地の造成(残置森林(最大範囲))には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。

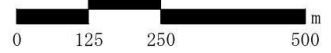


図 5-2-1-10-3 現存植生図

b) 植生自然度

「自然環境保全基礎調査植生調査」（昭和 57 年、環境庁）に準拠して、調査範囲の現存植生の自然度を区分した。各群落の自然度区分は表 5-2-1-10-9、植生自然度図は図 5-2-1-10-4 に示すとおりである。また、植生自然度別占有面積は、表 5-2-1-10-10 に示すとおりである。

調査範囲における面積の割合は、二次林を示す自然度 7 の 34.7% が最も高く、次いで造林地を示す自然度 6 が 30.2%、二次草原を示す自然度 5 が 10.1% であり、二次植生が大部分を占める状況が示されている。

シイ・カシ二次林とケヤキ群落は、自然林に近い二次林として自然度 8 に該当する。ケヤキ群落は平作川に面した斜面に 2 箇所のみ、シイ・カシ二次林は斜面や尾根に断片的に分布するが、いずれも小面積である。オニシバリーコナラ群集、アカメガシワーカラスザンショウ群落が該当する自然度 7 は、山地に広く分布しており、特に実施区域（宅地の造成）及び実施区域（発生土処分場）における比率も高い。同様に、スギ植林、オオシマザクラ植林、竹林が該当する自然度 6 も山地に広く分布しており、実施区域全体における比率も高い。このほか、自然度 5 に該当するメダケ群落、アズマネザサ群落、ススキ群団、自然度 4 に該当するクズ群落、自然度 3 に該当するその他植林は、道路の隣接地や造成跡地、耕作放棄地等を中心に広く点在している。自然度 2 に該当する畑雑草群落、水田雑草群落、ゴルフ場・芝地、緑の多い住宅地は、主に調査範囲北部にまとまって分布している。

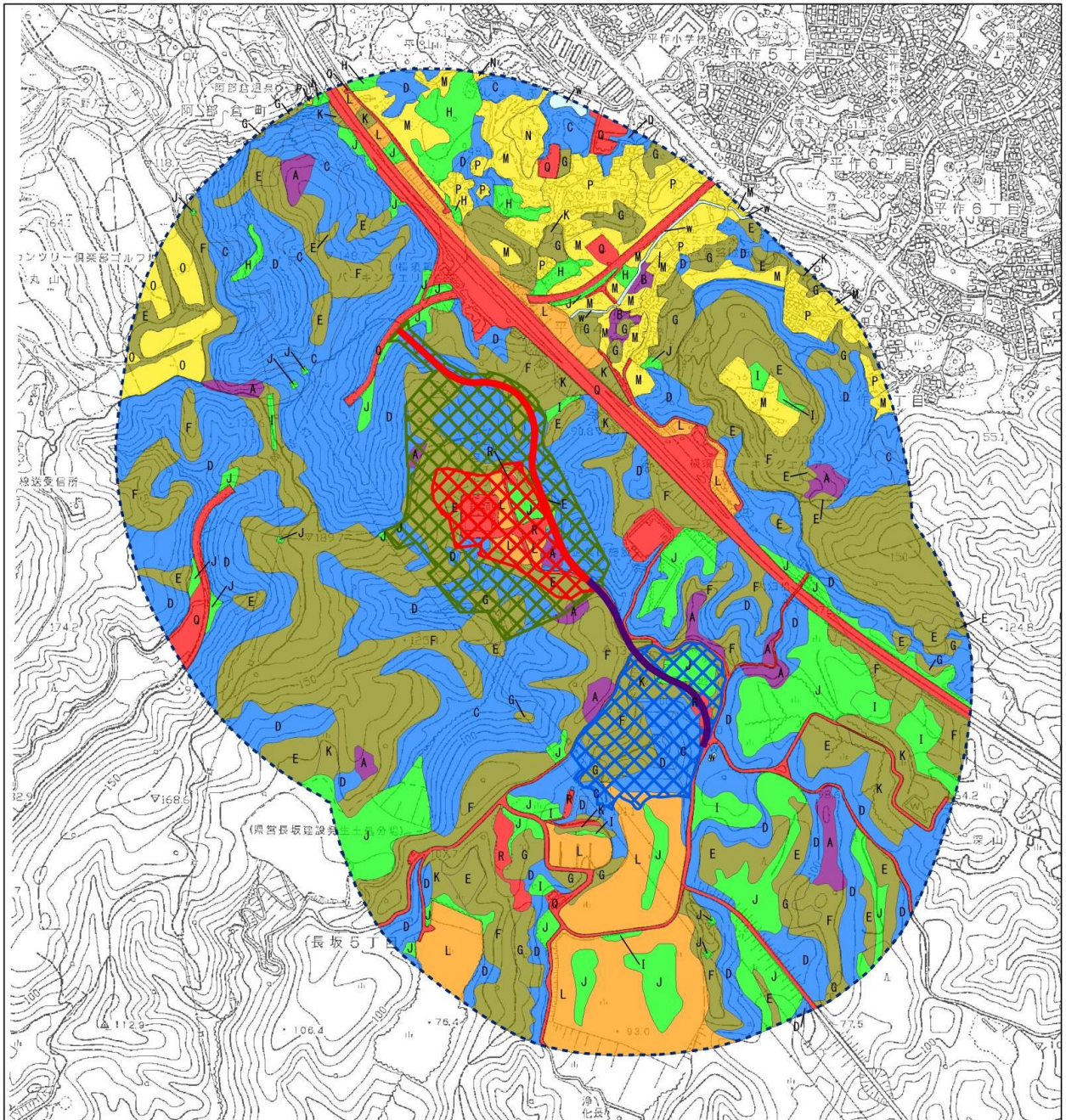
表5-2-1-10-9 各群落の植生自然度区分

群落名	植生自然度
シイ・カシ二次林	8
ケヤキ群落	
オニシバリーコナラ群集	7
アカメガシワーカラスザンショウ群落	
スギ植林	6
オオシマザクラ植林	
竹林	
メダケ群落	5
アズマネザサ群落	
ススキ群団	
クズ群落	4
その他植林	3
畑雑草群落	2
水田雑草群落	
ゴルフ場・芝地	
緑の多い住宅地	
市街地	1
造成地	
開放水域	—

表5-2-1-10-10 植生自然度別占有面積

植生自然度	群落名	調査範囲		実施区域 (廃棄物処理施設)		実施区域 (宅地の造成)		実施区域 (発生土処分場)	
		面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)
8	シイ・カシ二次林	4.14	1.6	0.20	4.5	0.18	1.6	-	-
	ケヤキ群落								
7	オニシバリーコナラ群集	88.80	34.7	0.24	5.5	6.41	54.5	2.43	34.4
	アカメガシワーカラスザンショウ群落								
6	スギ植林	77.35	30.2	1.65	38.0	5.00	42.5	2.58	36.5
	オオシマザクラ植林								
	竹林								
5	メダケ群落	25.78	10.1	0.34	7.8	0.14	1.2	0.75	10.6
	アズマネザサ群落								
	ススキ群団								
4	クズ群落	6.15	2.4	-	-	-	-	0.69	9.7
3	その他植林	15.97	6.2	0.73	16.8	0.00	0.0	0.28	4.0
2	畑雑草群落	18.93	7.4	-	-	-	-	-	-
	水田雑草群落								
	ゴルフ場・芝地								
	緑の多い住宅地								
1	市街地	18.25	7.1	1.20	27.5	0.03	0.3	0.34	4.8
	造成地								
-	開放水域	0.45	0.2	-	-	-	-	-	-
合計		255.83	100.0	4.36	100.0	11.77	100.0	7.07	100.0

注) 表中の数値は四捨五入しているため、合計値が一致しない場合がある。



- 凡例
- : 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む)
 - : 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲))
 - : 発生土処分場
 - : 調査範囲
 - : 新設搬入道路
 - : 既設改修道路
- | | | | |
|------|-----------------------|------|-------------|
| 自然度8 | A : シイ・カシニ次林 | 自然度4 | K : クズ 群落 |
| | B : ケヤキ群落 | 自然度3 | L : その他植林 |
| 自然度7 | C : オニシバリ・コナラ群集 | 自然度2 | M : 畑雑草群落 |
| | D : アカメガシワ・カラスザンショウ群落 | | N : 水田雑草群落 |
| 自然度6 | E : スギ植林 | | O : ゴルフ場・芝地 |
| | F : オオシマザクラ植林 | | P : 緑の多い住宅地 |
| | G : 竹林 | 自然度1 | Q : 市街地 |
| 自然度5 | H : メダケ群落 | | R : 造成地 |
| | I : アズマネザサ群落 | その他 | w : 開放水域 |
| | J : ススキ群団 | | |
- 注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。



図 5-2-1-10-4 植生自然度図

b 群落構造

各群落の組成、外観、立地条件等の特徴は、以下に示すとおりである。また各群落の断面図は、図5-2-1-10-5(1/11)～(11/11)に示すとおりである。

a) シイ・カシ二次林

シイ・カシ二次林は、台地の肩部や急斜面等の乾燥しやすい立地に成立する常緑広葉樹二次林で、主に残存したスタジイやカシ類が萌芽再生して樹林を形成しているものと考えられる。

調査範囲内の群落は、群落高9～12m程度の高木林または亜高木林で、高木層や亜高木層にはスタジイ、タブノキ、アカガシ等の常緑広葉樹が優占しており、林内は薄暗い。低木層は、高さ3～3.5m、植被率7～60%であり、アオキ、ヤブツバキ、タブノキ等の常緑樹が主体となっている。草本層は、高さ0.3～0.7m、植被率45～100%であり、ベニシダ、ナガバジャノヒゲ、ヤブコウジ等の耐陰性の高い種が生育するほか、テイカカズラ、キヅタ等の常緑のつる植物が出現している。この群落は、主にやや土壌の厚い斜面や尾根に断片的に点在しているが、いずれも面積は小さい。

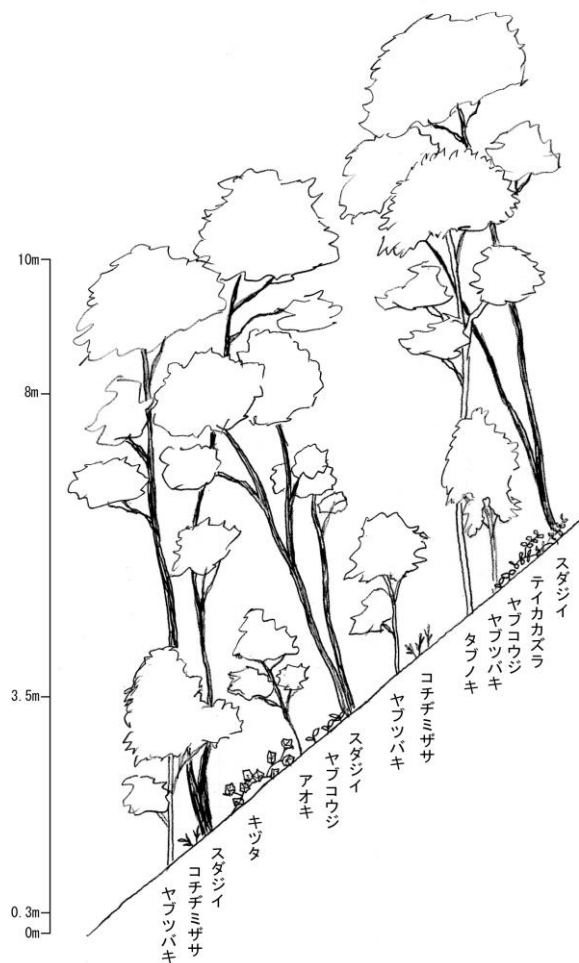


図 5-2-1-10-5(1/11) シイ・カシ二次林

b) ケヤキ群落

ケヤキ群落は、溪谷沿いの崖錐や岩角地に成立する夏緑広葉樹林である。

調査範囲内の群落は、群落高12m程度の高木林で、高木層にケヤキが優占するほか、亜高木層以上にはムクノキ、ケンポナシ等が混生する。低木層は、高さ8m程度、植被率20%であり、アオキ、アズマネザサ等が生育する。草本層は、高さ0.3m程度、植被率7%程度であり、ヤブラン、リョウメンシダ、ヤマグワ等が生育する。この群落は、平作川に面した斜面の2箇所分布している。自然植生に近い群落と考えられるが、小面積であることや、住宅地や耕作地に隣接し低木層にアズマネザサが多く生育することなどから、人為的な攪乱を強く受けている二次林として区分した。

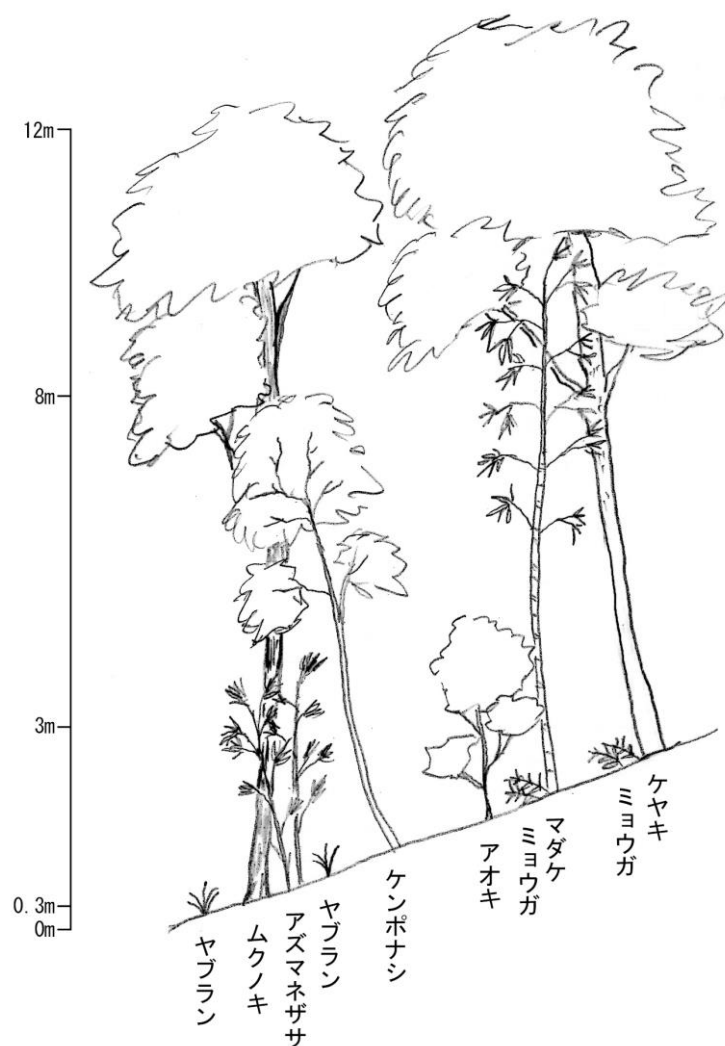


図5-2-1-10-5(2/11) ケヤキ群落

c) オニシバリーコナラ群集

オニシバリーコナラ群集は、低地丘陵地や斜面に成立する夏緑広葉樹林で、薪炭林、農用林として利用されてきた二次林である。

調査範囲内の群落は、群落高10～11m程度であり、コナラ、ミズキが優占し、亜高木層以上には、オオシマザクラ、シロダモ、エノキ等が混生する。低木層は、高さ2.5～3.5m、植被率80～90%であり、アオキ、シロダモ、ヒサカキ等の常緑広葉樹のほか、イヌビワ、ムラサキシキブ、ヤマウグイスカグラ等の夏緑広葉樹やアズマネザサが混生する。草本層は、高さ0.5～0.9m程度、植被率15～50%であり、ベニシダ、ナガバジャノヒゲ、ヤブラン等が生育する。この群落は、尾根筋や緩斜面等にややまとまって分布している。

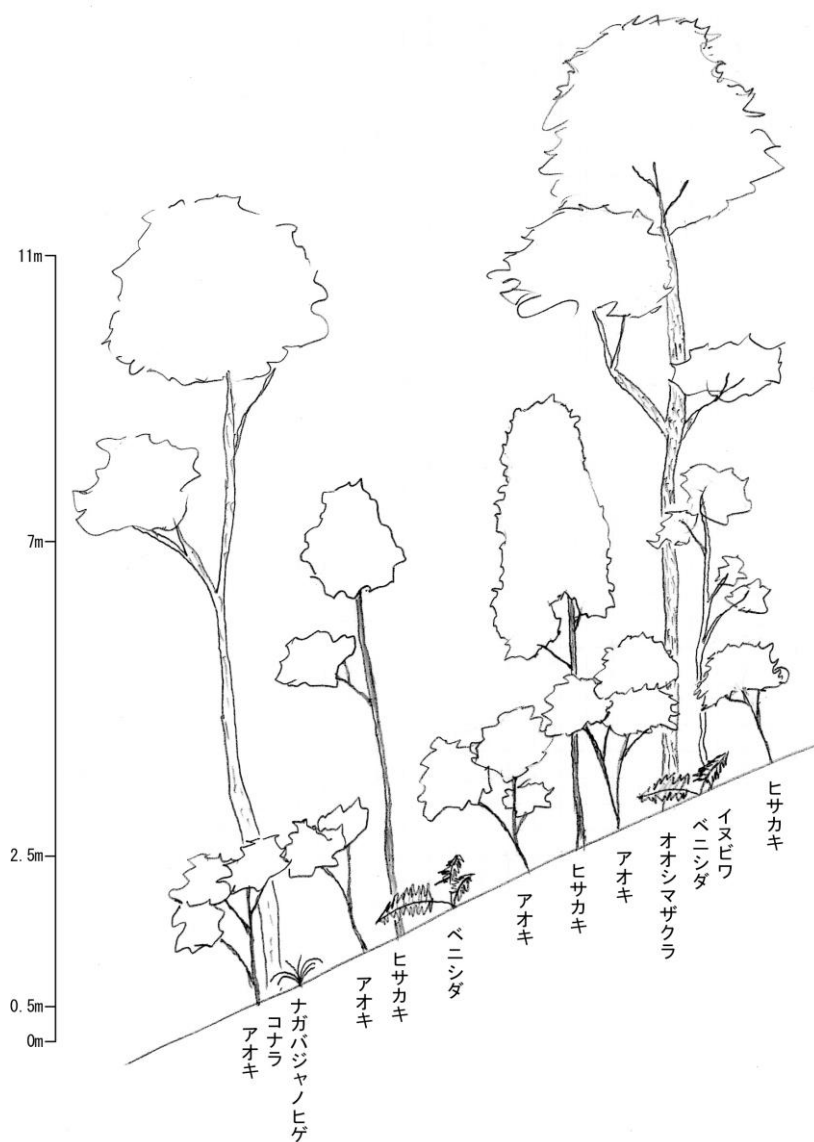


図5-2-1-10-5(3/11) オニシバリーコナラ群落

d) アカメガシワーカラスザンショウ群落

アカメガシワーカラスザンショウ群落は、森林伐採跡地や耕作放棄地、崩壊性法面等に成立する先駆性の夏緑広葉樹二次林である。

調査範囲の群落は、群落高7~8m程度の亜高木林であり、低木層以上にアカメガシワ、カラスザンショウ、ハゼノキ、ヤマグワ等の先駆性の夏緑広葉樹が混生する。林床は明るく、草本層は高さ0.5~1.2m程度、植被率90%でコチヂミザサ、キヅタ、ヨモギ、セイタカアワダチソウ等多くの種が生育する。この群落は主に急傾斜地に分布しており、調査範囲の面積の3割近くを占めている。

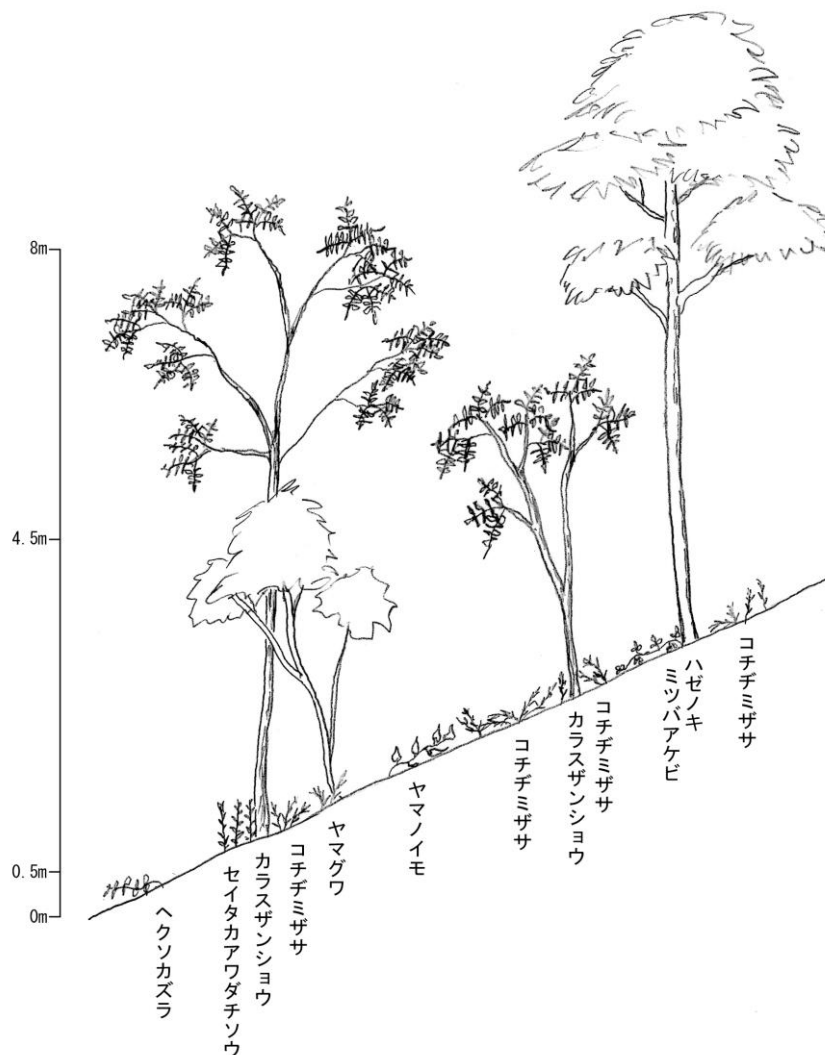


図5-2-1-10-5(4/11) アカメガシワーカラスザンショウ群落

e) スギ植林

スギ植林は、木材生産を目的として植林された常緑針葉樹林である。

調査範囲内のスギ植林は、群落高が8.5～13m程度でスギが高被度で植林されている。放置された林分においては、亜高木層にシラカシやアカメガシワが混生していた。低木層は、高さ2.5～3.5m、植被率は5～90%であり、アオキ、シロダモ等の常緑広葉樹のほか、イヌビワが生育している。草本層は、高さ0.4～1m、植被率10～80%であり、リョウメンシダ、ベニシダ、イノデ等のシダ類や、シロダモ、アオキ等の常緑広葉樹が生育していた。林床の管理状況により、低木層や草本層の植被率が大きく異なった。スギ植林は、斜面下部の緩傾斜地や谷部の平坦地などに、パッチ状に点在している。

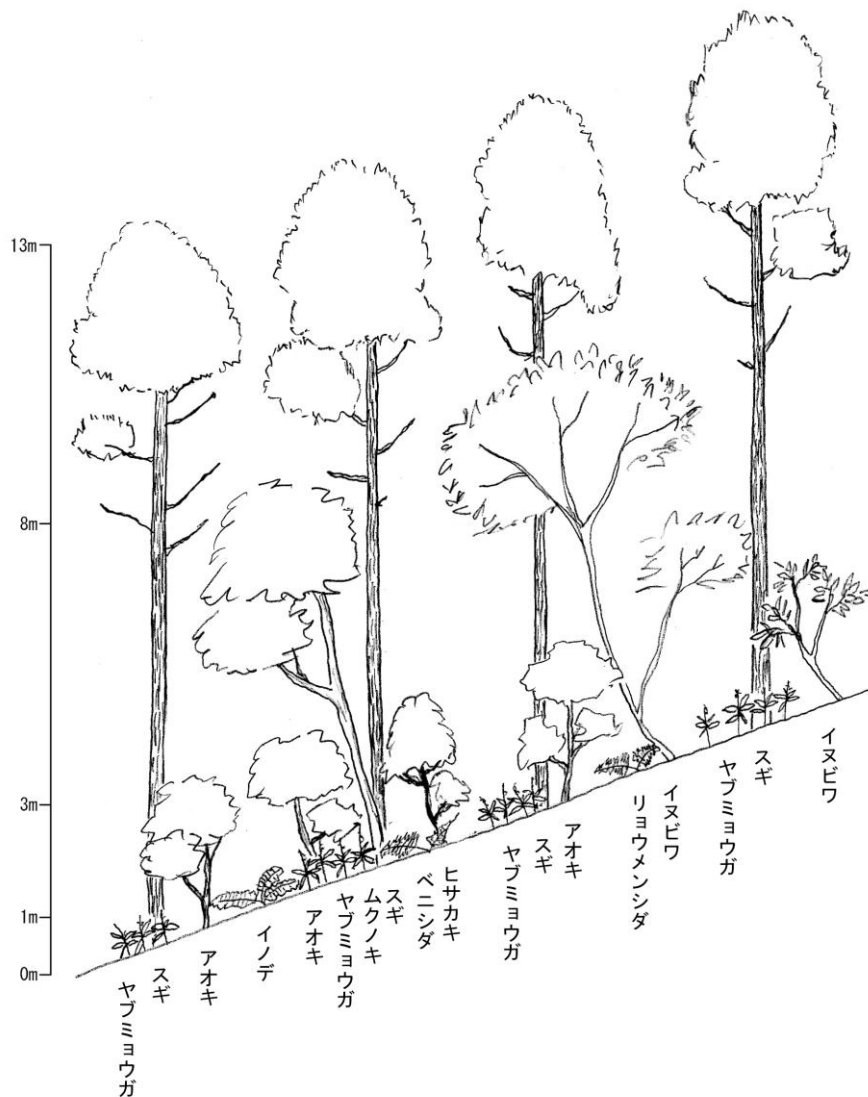


図5-2-1-10-5(5/11) スギ植林

f) オオシマザクラ植林

オオシマザクラ植林は、薪炭材として植栽されたオオシマザクラが優占する夏緑広葉樹林で、コナラ林と同じように維持管理されてきた人工林である。前述のオニシバリーコナラ群集と種组成的に近似しており、今回は高木層にオオシマザクラが優占する植分をオオシマザクラ植林として区分した。

調査範囲内のオオシマザクラ植林は、群落高10～11mでオオシマザクラが優占し、亜高木層以上にシロダモ、コナラ、カラスザンショウ等の夏緑広葉樹が混生している。低木層は、高さ2.5～3m、植被率70～90%であり、アオキ、シロダモ、ムラサキシキブ、アズマネザサ等が生育する。草本層は、高さ0.5～0.7m、植被率30～45%であり、ナガバジャノヒゲ、ヤブラン、キツタ、キチジョウソウ等の耐陰性の草本が生育する。オオシマザクラ植林は、斜面上部から尾根にかけて広く分布しており、調査範囲の面積の2割以上を占めている。

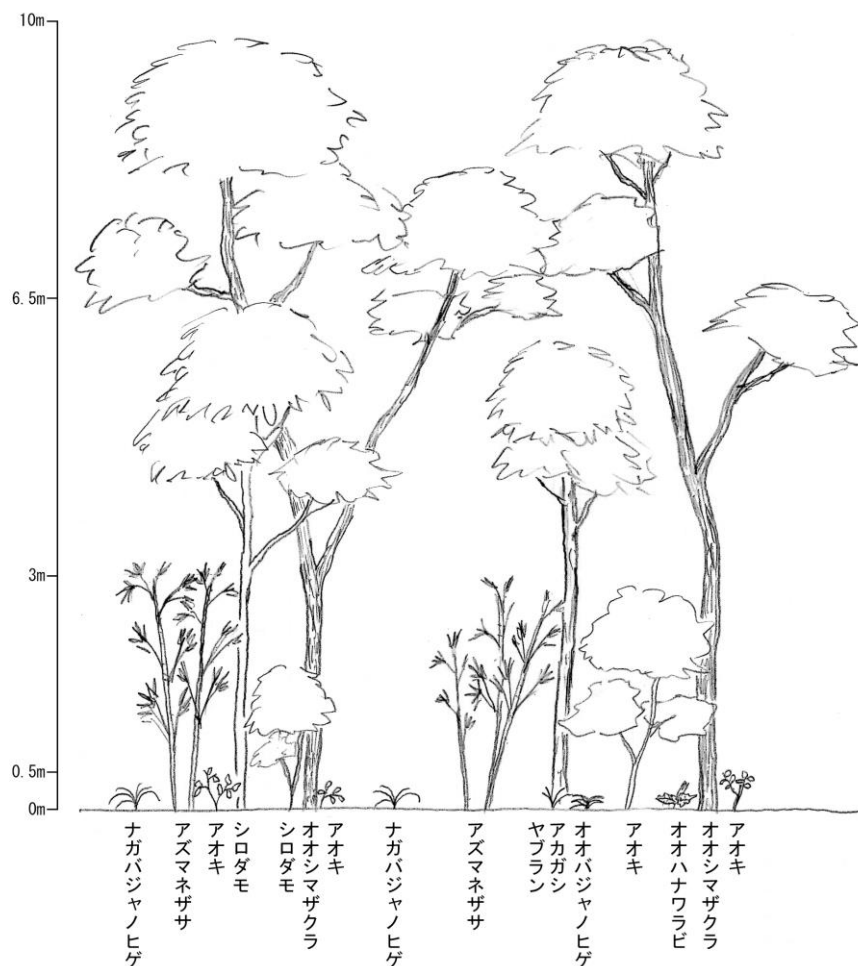


図 5-2-1-10-5 (6/11) オオシマザクラ植林

g) 竹林

竹林は、用材、工芸材料の利用、筍採取や護岸を目的に植栽されたものが起源で、近年は放置されて荒廃したものが増加している。

調査範囲内の竹林は、高さ10m程度のモウソウチクが高被度で優占している。亜高木層を欠き、低木層は高さ1.6~3.5m程度、植被率10%程度であり、モウソウチクのほか、ヒサカキ、タブノキ、アオキ等の常緑広葉樹が散生している。草本層は、高さ0.5~0.7m程度、植被率10%程度であり、コチヂミザサ、フモトシダ、ベニシダが生育している。竹林は、主に斜面下部から中腹にかけて、広くパッチ状に分布している。

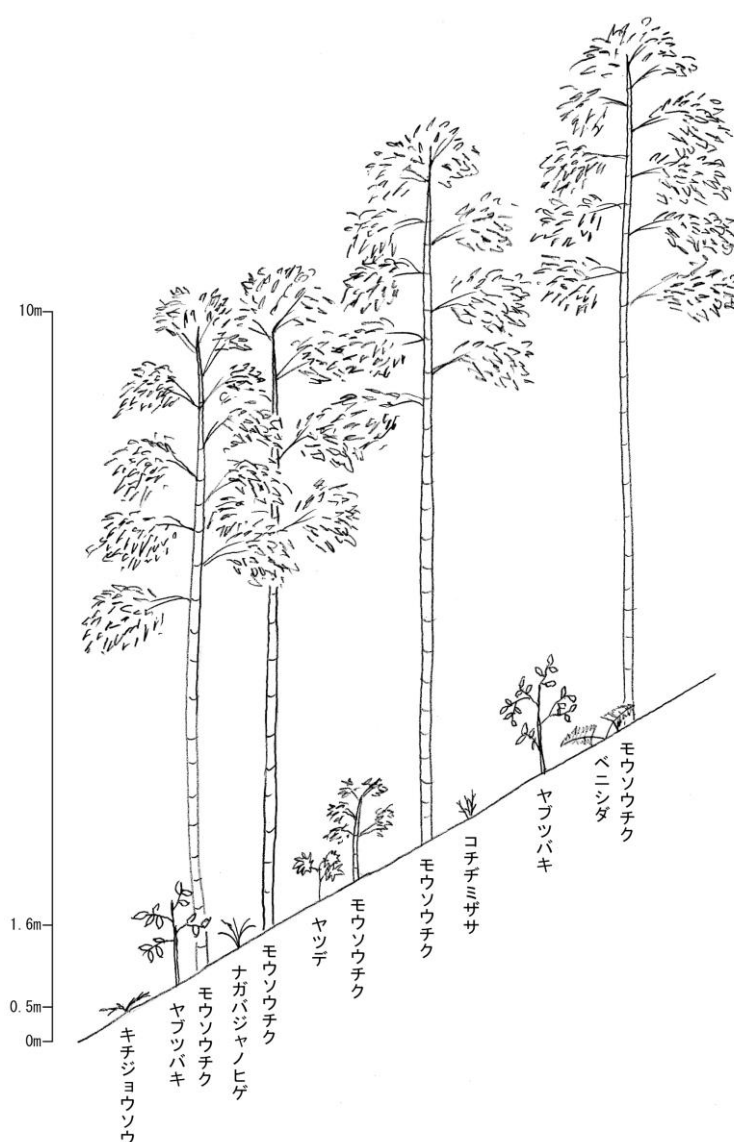


図 5-2-1-10-5(7/11) 竹林

h) メダケ群落

メダケ群落は、海岸風衝地や川岸付近に密生して成立するタケ群落である。

調査範囲内の群落は、高さ6.5m程度のメダケが高被度で優占している。林床は暗く、ヤマグワやムクノキの生育が確認されたものの、林床植生は極めて乏しい。この群落は、平作川近くの耕作放棄地などに、ややまとまって分布している。

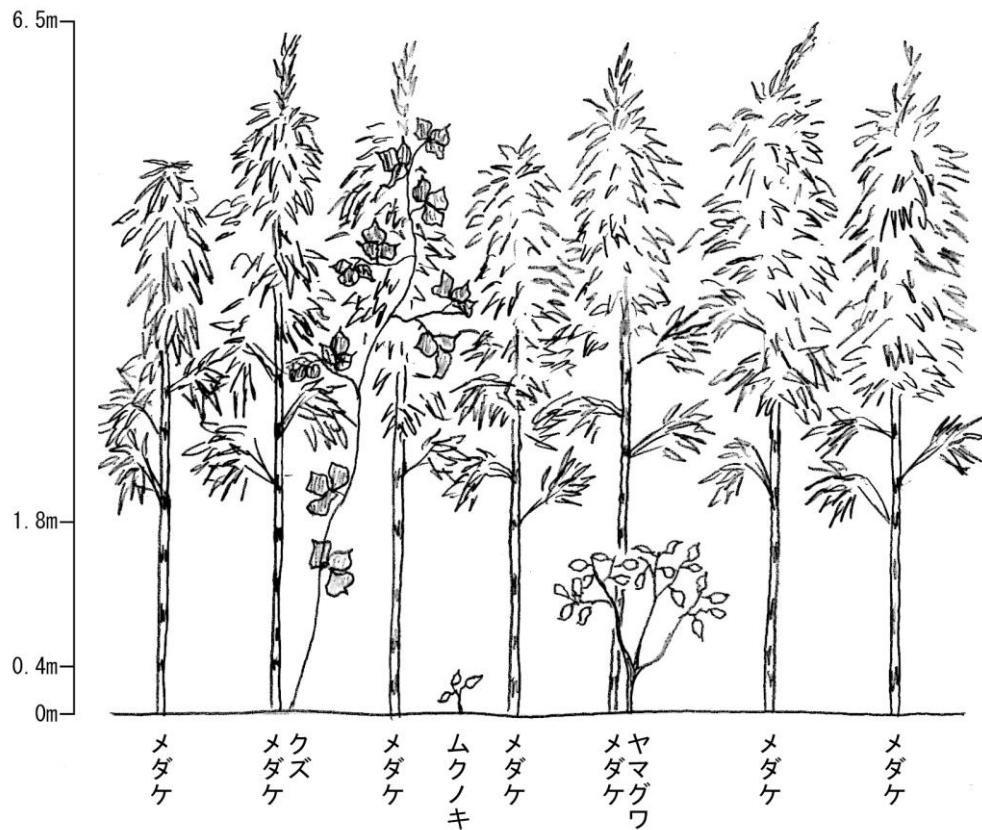


図5-2-1-10-5(8/11) メダケ群落

i) アズマネザサ群落

アズマネザサ群落は、伐採跡地や河川堤防などの陽地に成立するタケ群落である。調査範囲内の群落は、高さ3.5m程度のアズマネザサが高被度で優占している。そのほか、クサギ、カラスザンショウ等の先駆性樹種やカラスウリ、センニンソウ等のつる植物が混生している。林床は暗く、キチジョウソウやセンニンソウの生育が確認されたものの、林床植生は極めて乏しい。この群落は、伐採跡地や造成地などに、ややまとまって分布している。

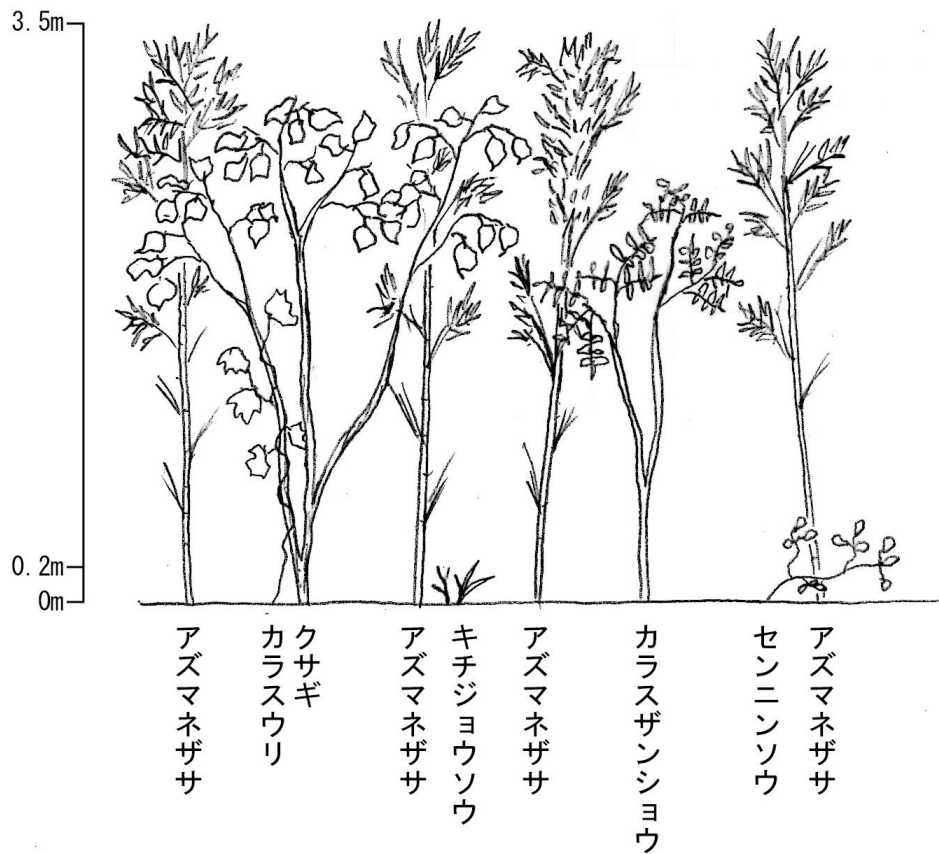


図 5-2-1-10-5(9/11) アズマネザサ群落

j) ススキ群団

ススキ群団は、放牧地、伐採跡地、耕作放棄地、河川敷等に成立する多年生の高茎草本群落で、ススキが優占する。

調査範囲内の群落は、草丈1.5m程度であり、ススキが高被度で優占しているほか、セイタカアワダチソウ、ヨモギ等の高茎草本が出現している。この群落は、道路の法面や造成地などにややまとまって広く分布している。



図5-2-1-10-5(10/11) ススキ群団

k) クズ群落

クズ群落は、既存の森林の破壊や、人為的攪乱を受けた後に、先駆的に発達する群落である。

調査範囲内の群落は、草丈0.7～1.6m程度であり、クズが高被度で優占しているほか、セイタカアワダチソウ、ヨモギ等の草本類が出現している。この群落は、高速道路の法面、造成地、耕作放棄地などにややまとまって分布している。

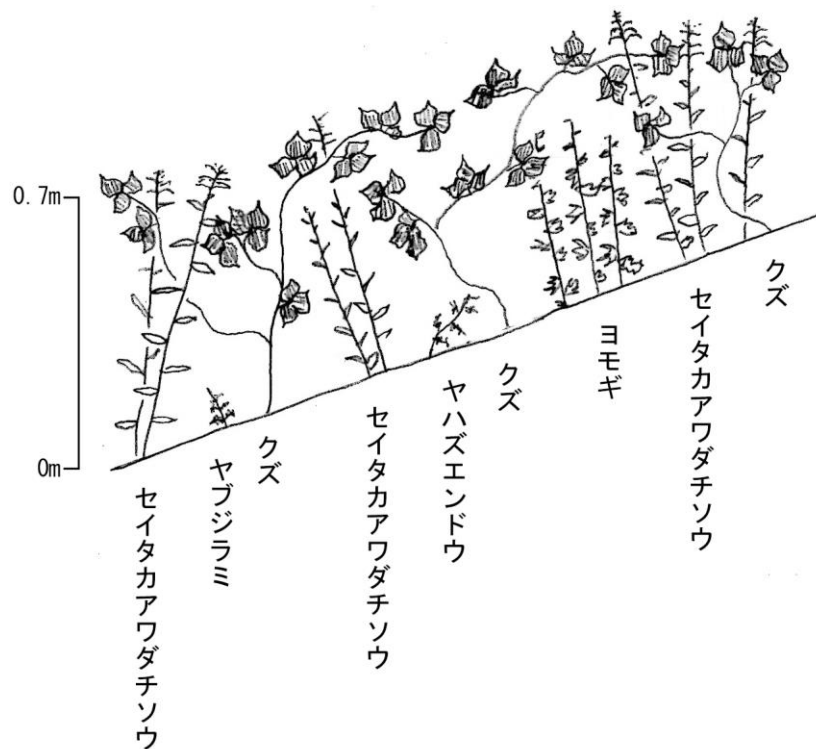


図5-2-1-10-5(11/11) クズ群落

l) その他植林

本調査では、造成地の修景等を目的として主に在来樹種を植林した植分を「その他植林」として区分したが、植物群落ではなく土地利用形態の一つとして扱っている。

調査範囲内では、植生高は5m程度で生育種は植栽地により様々であるが、シラカシ、アラカシ、ウラジログシ、モッコク、ネズミモチ等の在来の常緑広葉樹種を主体に植栽されている。この植林は、高速道路の法面や造成地などに分布している。

m) 畑地雑草群落

畑地雑草群落は、畑地に成立する好窒素性の一年生草本を主体とする草本群落で

ある。本調査では、畑地をこの群落として区分したが、植物群落ではなく土地利用形態の一つとして扱っている。また、対象地は私有地であるため、本調査では詳細な調査を実施していない。

調査範囲内の群落は、草丈0.35m程度と推察され、クワクサ、スベリヒユ、イヌビユ等の一年生草本が主体だと考えられる。この群落は、調査範囲北部にまとまって分布している。

n) 水田雑草群落

水田雑草群落は、水田耕作地に成立する好窒素性の湿性の一年生草本を中心とした草本群落である。本調査では、『横須賀しょうぶ園』の湿性草地（しょうぶ苑）をこの群落として区分したが、植物群落ではなく土地利用形態の一つとして扱っている。また、公園であることから、本調査では詳細な調査を実施していない。

調査範囲内の群落は、草丈0.7m程度と推定されるが、生育種の詳細は不明である。

o) ゴルフ場・芝地

ゴルフ場・芝地は、主にイネ科の外来種を用いた、定期的な維持管理が行われている人工草地である。本調査では、調査範囲北西部のゴルフ場をこの区分とし、土地利用形態の一つとして扱っている。また、対象地は私有地であるため、本調査では詳細な調査を実施していない。

ゴルフ場の草地は、定期的な管理を実施していることから、草丈は0.05m程度と推定される。

c 潜在自然植生

「神奈川県潜在自然植生図」（昭和50年、神奈川県教育委員会）、「神奈川県の潜在自然植生」（昭和51年、神奈川県教育委員会）、「日本植生誌 関東」（昭和56年、宮脇）、「よこすかの植生」（平成13年、横須賀市）及び現地調査によって、調査範囲の潜在自然植生は、ヤブツバキクラス域に属する5群落単位で構成されると推測される。

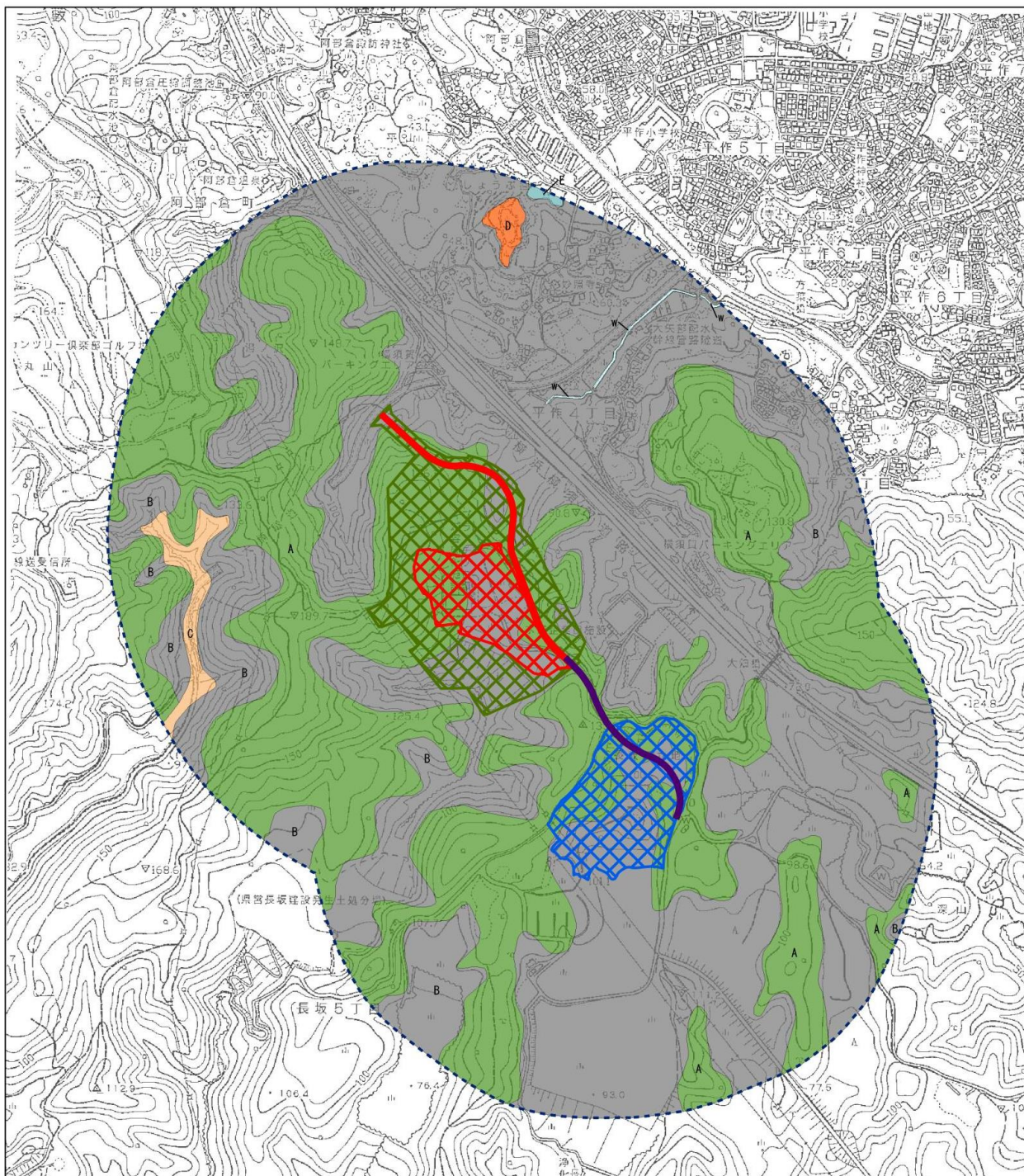
調査範囲の潜在自然植生の分布は、山地においては尾根から斜面の大部分がヤブコウジースダジイ群集、谷筋に沿って斜面下部はイノデータブノキ群集、松越川沿いの谷はコクサギーケヤキ群集が成立するものと推定される。特に表層土が失われている造成地や、造成跡で現在ススキ群団となっている立地についても、客土により本来の立地が回復できることから、上記の潜在自然植生が成立するものと推定される。また、調査範囲北東部の『横須賀しょうぶ園』における湿性草地はオニスゲーハンノキ群集、『横須賀しょうぶ園』に隣接した開放水域は浮葉沈水草本植物群落の潜在自然植生域と推察される。

潜在自然植生の群落別占有面積は表5-2-1-10-11、潜在自然植生図は図5-2-1-10-6に示すとおりである。



表5-2-1-10-11 潜在自然植生群落別占有面積

群落名	調査範囲		実施区域 (廃棄物処理施設)		実施区域 (宅地の造成)		実施区域 (発生土処分場)	
	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)
ヤブコウジースダジイ群集	104.00	40.7	1.92	44.1	8.04	68.8	3.45	48.8
イノデータブ群集	148.63	58.1	2.44	55.9	3.65	31.2	3.62	51.2
コクサギーケヤキ群集	2.12	0.8	-	-	-	-	-	-
オニスゲーハンノキ群集	0.69	0.3	-	-	-	-	-	-
浮葉沈水草本植物群落 (ヒルムシロクラス)	0.15	0.1	-	-	-	-	-	-
開放水域	0.23	0.1	-	-	-	-	-	-
合計	255.83	100.0	4.36	100.0	11.69	100.0	7.07	100.0

注) 表中の数値は四捨五入しているため、合計値が一致しない場合がある。



凡例

- | | | | |
|---|-------------------------|---|---------------|
|  | : 廃棄物処理施設
(宅地の造成を含む) |  | : ヤブコウジスダジイ群集 |
|  | : 宅地の造成
(残置森林(最大範囲)) |  | : イノデ-タブノキ群集 |
|  | : 発生土処分場 |  | : コクサギ-ケヤキ群集 |
|  | : 調査範囲 |  | : オノスゲ-ハンノキ群集 |
|  | : 新設搬入道路 |  | : 浮葉沈水草本植物群落 |
|  | : 既設改修道路 |  | : 開放水域 |

注) 宅地の造成(残置森林(最大範囲))には、搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される法面等を含んでいる。



図 5-2-1-10-6 潜在自然植生図

イ 重要な植物種・植物群落

ア) 調査事項

調査地域に生育する重要な植物種・植物群落の生育状況等とした。

イ) 調査範囲

現地調査の範囲は、「ア 植物相」と同じ範囲とした。

ウ) 調査方法

現地調査の結果を踏まえ、学術上または希少性の観点から、表5-2-1-10-12に示す選定基準に該当するものを、重要な植物として抽出した。

エ) 調査結果

重要な植物の抽出結果は表5-2-1-10-13、各種の確認状況及び一般生態は表5-2-1-10-14に示すとおりである。ウバメガシは下表の④に該当する種であるが、現地での確認は明らかな植栽個体であったことから重要な植物の対象外とした。なお、確認位置は、盗掘防止の観点から図示していない。

表5-2-1-10-12 重要な植物の選定基準

番号	選定基準	カテゴリー
①	「文化財保護法」(昭和25年、法律第214号)に基づく天然記念物及び特別天然記念物に指定されている種	天然記念物 特別天然記念物
②	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成4年、法律第75号)に基づく国内希少野生動植物種、国際希少野生動植物種及び緊急指定種に指定されている種	国内希少野生動植物種 国際希少野生動植物種 緊急指定種
③	「環境省レッドリスト(維管束植物)」(平成24年、環境省)に記載されている種	絶滅(EX) 野生絶滅(EW) 絶滅危惧種ⅠA類(CR) 絶滅危惧種ⅠB類(EN) 絶滅危惧種Ⅱ類(VU) 準絶滅危惧(NT) 情報不足(DD) 絶滅のおそれのある地域 個体群(LP)
④	「神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006」(平成18年、神奈川県立生命の星・地球博物館)に記載されている種	絶滅 野生絶滅 絶滅危惧Ⅰ類 絶滅危惧ⅠA類 絶滅危惧ⅠB類 絶滅危惧Ⅱ類 準絶滅危惧 減少種 希少種 要注意種 注目種 情報不足 不明種 絶滅のおそれのある地域 個体群

表5-2-1-10-13 重要な植物一覧

番号	科名	和名	選定基準			
			①	②	③	④
1	キキョウ	ツルギキョウ			VU	絶滅危惧 I A類
2	ラン	エビネ			NT	絶滅危惧 II類
3		キンラン			VU	絶滅危惧 II類
4		シュスラン				絶滅危惧 I A類
合計	2科	4種	0種	0種	3種	4種

注) 表中の①～④の選定基準は、表5-2-1-10-12に示すとおりである。

表5-2-1-10-14 重要な植物の確認状況及び一般生態

種名	項目	内容
ツルギキョウ	確認状況	<p><秋季> 実施区域の周辺の落葉広葉樹林の谷筋で1個体を確認。</p> <p><早春季> 実施区域内(宅地の造成・新規搬入道路)の林道脇の明るい草地2箇所、それぞれ2個体と6個体を確認。また、実施区域の周辺のアスファルト路上の堆積物上で2個体を確認。いずれも開花が確認された。</p> <p><春季> 実施区域内(宅地の造成)の明るい落葉広葉樹林で1個体を確認。</p>
	一般生態	山地～丘陵地に生えるつる性の多年草。国内では、本州（関東以西）～九州に分布する。
エビネ	確認状況	<p><夏季> 実施区域内（宅地の造成）の落葉広葉樹林で5個体、実施区域の周辺の落葉広葉樹林で3個体を確認。</p> <p><春季> 実施区域内(宅地の造成)の落葉広葉樹林の3箇所、それぞれ9個体、23個体、30個体を確認。また、実施区域の周辺の落葉広葉樹林の4箇所、それぞれ2個体、2個体、3個体、45個体を確認。いずれの地点においても開花が確認された。</p>
	一般生態	山野の樹林内に生える常緑性の多年草。国内では、北海道（西南部以南）、本州、四国、九州、琉球に分布する。
キンラン	確認状況	<p><春季> 実施区域の周辺の落葉広葉樹林の4箇所、それぞれ1個体、3個体、3個体、15個体を確認。また、常緑広葉樹の植林地においても5個体を確認。いずれの地点においても開花が確認された。</p>
	一般生態	山地や丘陵の疎林内や林縁に生える夏緑生の多年草。国内では、本州、四国、九州に分布する。
シュスラン	確認状況	<p><秋季> 実施区域の周辺の落葉広葉樹林の林道脇で7個体を確認。</p>
	一般生態	常緑広葉樹林の林床に生える常緑性多年草。国内では、本州（千葉県以西）、四国、九州、琉球に分布する。

注) 重要な植物種は、盗掘防止の観点から図示していない。

出典：「神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006」（平成18年、神奈川県立生命の星・地球博物館）

「神奈川県植物誌2001」（平成13年、神奈川県植物誌調査会編）

ウ 緑の量

ア) 調査事項

緑被率と緑の体積の状況とした。

イ) 調査範囲

現地調査の範囲は、「ア 植物相」と同じ範囲とした。

ウ) 調査方法

現地調査の結果をもとに、緑被率は植物群落の被覆面積を、緑の体積は各群落の平均高さに被覆面積を乗じることにより算出した。

エ) 調査結果

調査結果は、表5-2-1-10-15に示すとおりである。

緑被率及び緑の体積は、調査範囲で89.8%、17,209,094m³、実施区域（廃棄物処理施設）で72.5%、251,800m³、実施区域（宅地の造成）で99.7%、1,018,285m³、実施区域（発生土処分場）で95.2%、517,992m³であった。

表5-2-1-10-15 緑の量調査結果

群落名	平均 群落 高 (m)	調査範囲			実施区域 (廃棄物処理施設)			実施区域 (宅地の造成)			実施区域 (発生土処分場)		
		面積 (ha)	緑被率 (%)	緑の体積 (m ³)	面積 (ha)	緑被率 (%)	緑の体積 (m ³)	面積 (ha)	緑被率 (%)	緑の体積 (m ³)	面積 (ha)	緑被率 (%)	緑の体積 (m ³)
シイ・カシ二次林	10.33	3.77	1.5	389,914	0.20	4.5	20,262	0.18	1.6	18,600	0.00	-	-
ケヤキ群落	12.00	0.37	0.1	44,518	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オニシバリーコナラ群集	10.50	16.70	6.5	1,753,438	-	-	-	0.05	0.4	5,250	1.14	16.2	120,175
アカメガシワー カラスザンショウ群落	7.50	72.10	28.2	5,407,832	0.24	5.5	17,931	6.36	54.1	477,000	1.29	18.2	96,548
スギ植林	10.38	12.16	4.8	1,261,530	0.83	19.0	85,899	0.42	3.6	43,575	-	-	-
オオシマザクラ植林	10.33	56.93	22.3	5,882,736	0.83	19.0	85,361	4.33	36.8	447,433	2.44	34.5	252,307
竹林	10.00	8.27	3.2	826,545	-	-	-	0.24	2.1	24,000	0.14	2.0	13,895
メダケ群落	6.50	3.13	1.2	203,759	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アズマネザサ群落	6.50	3.00	1.2	194,768	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ススキ群団	1.73	19.65	7.7	340,584	0.34	7.8	5,854	0.14	1.2	2,427	0.75	10.6	12,937
クズ群落	1.15	6.15	2.4	70,736	-	-	-	-	-	-	0.69	9.7	7,910
その他植林	5.00	15.97	6.2	798,288	0.73	16.8	36,493	0.00	0.0	0	0.28	4.0	14,220
畑雑草群落	0.35	7.88	3.1	27,564	-	-	-	-	-	-	-	-	-
水田雑草群落	0.70	0.78	0.3	5,456	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ゴルフ場・芝地	0.05	2.86	1.1	1,428	-	-	-	-	-	-	-	-	-
緑の多い住宅地	-	7.42	0.0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
市街地	-	16.98	0.0	0	0.89	0.0	0	0.03	0.0	0	0.18	0.0	0
造成地	-	1.26	0.0	0	0.31	0.0	0	0.00	0.0	0	0.16	0.0	0
開放水域	-	0.45	0.0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	-	255.83	89.8	17,209,094	4.36	72.5	251,800	11.77	99.7	1,018,285	7.07	95.2	517,992

注) 表中の数値は四捨五入しているため、合計値が一致しない場合がある。

エ 生育環境との関わり

ア) 調査事項

気象、水象、地象、動物等の生育環境と植物との関わり及び植物相互の関わり
の状況とした。

イ) 調査範囲

現地調査の範囲は、「ア 植物相」と同じ範囲とした。

ウ) 調査方法

生育環境との関わりを明らかにするために、既存資料により気象、地象及び水象の概要を把握した。また、調査範囲において確認された代表的な群落であるシイ・カシ二次林、スギ植林、オオシマザクラ植林、オニシバリーコナラ群集の4地点において、深さ1mの土壌断面調査を行い、生息環境としての土壌の状況を明らかにした。調査方法は、「自然環境アセスメント技術マニュアル」(平成7年、(財)自然環境研究センター)に準じた。調査期日は表5-2-1-10-16に、調査地点は図5-2-1-10-7に示すとおりである。

表5-2-1-10-16 土壌調査期日

調査事項	調査時期	調査期日
生育環境との関わり	秋季	平成24年11月8日～9日

エ) 調査結果

気象、地象、水象の概況及び土壌断面調査結果は、以下に示すとおりである。なお、動物等の生育環境と植物の関わり及び植物相互のかかわりの状況については、生態系の観点から「別添5-2-5 4 植物・動物・生態系」(P.975)で詳述する。

a 気象、地象、水象の概況

「平成24年度版横須賀市統計書」(平成24年、横須賀市)によれば、平成23年の横須賀市年平均気温は16.6℃で、年間の降水量は約1,466.7mmである。

横須賀市は、西部の大楠山と武山を中心とする山地と、衣笠から野比に至る丘陵地、宮田台地を骨格とし、その間に平作川流域の平地が広がっている。調査範囲は大楠山の南東部に位置し、山地及び丘陵が主体となって、大部分が三浦層群に相当する砂泥互層から成っている。

b 分布土壌とその性質

「土地分類図（神奈川県）」（昭和50年、国土庁）によれば、調査範囲の土壌は、褐色森林土（乾性褐色森林土、褐色森林土、細粒褐色森林土）、黒ボク土、グライ土（細粒強グライ土）の分布が示されている。褐色森林土は山地の森林下に広く分布している褐色の土壌で、有機物が蓄積した黒色の表層と褐色の下層からなる。黒ボク土は、火山噴出物及びその含有率が比較的高い母材に由来する土壌で、主に台地から丘陵地などに分布している。グライ土は、地下水に浸されて酸素が欠乏することで鉄分が還元されて生じた青灰色の土壌で、低湿地などにみられる。

現地調査を実施した4地点の土壌調査では、いずれも褐色森林土が確認された。各地点の断面調査結果は、表5-2-1-10-17に示すとおりである。

a) S1（シイ・カシ二次林：植生調査地点Q11）

A₀*層のうちL層が1cm、FH層が5cmであった。

A*層は土厚15～25cmであり、黒褐色で腐食を含む土壌であった。土性は埴質壤土で、堅密度の値は小さく柔らかい土壌であった。また、土湿は半湿で細～大の根茎があり、特に中根に富んでいた。また細礫も含んでいた。A層とB層の境界は明瞭であった。

B*層はにぶい黄橙色で、土厚75～85cm、A層よりはやや堅密度の値は大きいが比較的柔らかい土壌であった。土質は半湿で細～大の根茎を含んでいた。

b) S2（スギ植林：植生調査地点Q23）

A₀層のうちL層が5cm、FH層が2cmであった。

A層は2層に分かれており、A₁層とA₂層の境界は判然であった。A₁層は土厚20～25cm、黒褐色で腐植を含む土壌であった。土性は埴質壤土で、堅密度の値は小さく柔らかい土壌であった。また、土湿は半湿で細～大の根茎を含んでいた。A₂層は土厚22～25cm、暗褐色で腐植を含む土壌であった。土性は埴質壤土で、堅密度の値は小さく柔らかい土壌であった。また、土湿は半湿で小根を含んでいた。A層とB層の境界は漸変であった。

B層は2層に分かれており、B₁層とB₂層の境界は明瞭であった。B₁層は褐色で土厚40cm、A層よりはやや堅密度の値は大きいが比較的柔らかい土壌であった。土性は埴質壤土で、土湿は半湿で細～中の根茎を含んでいた。B₂層は灰黄褐色で土厚10cm、堅密度の値が大きく、絞め固まった土壌であり、構造は壁状となっていた。土性は壤土で、土湿は半湿であった。

* 「A₀層、A層、B層」：森林土壌の表層付近の断面は、以下に示す層に大別される。

・A₀層：最も表層の、落葉落枝などの未分解また分解された植物遺体からなる有機質層。分解の程度によりL層（落葉層）、F層（腐葉層）、H層（腐植層）の3層に細分される。なお、F層とH層が明瞭に区分できない場合には、FH層と標記する。

・A層：表層またはA₀層の下に生成された無機質層。腐植化した有機物が集積する。

・B層：風化の進んだ無機質層で腐植に乏しい。

c) S3 (オオシマザクラ植林：植生調査地点Q12)

A₀層のうちL層が6cm、FH層が3cmであった。

A層は2層に分かれており、A₁層とA₂層の境界は漸変であった。A₁層は土厚10～25cm、黒褐色で腐植を含む土壌であった。土性は埴質壤土で、堅密度の値は小さく柔らかい土壌であった。また、土湿は半湿で細～小の根茎を含んでいた。A₂層は土厚5～31cm、暗褐色で腐植を含む土壌であった。土性は埴質壤土で、A₁層よりはやや堅密度の値は大きいと比較的柔らかい土壌であった。また、土湿は半湿で細根と太い根茎を含んでいた。A層とB層の境界は判然であった。

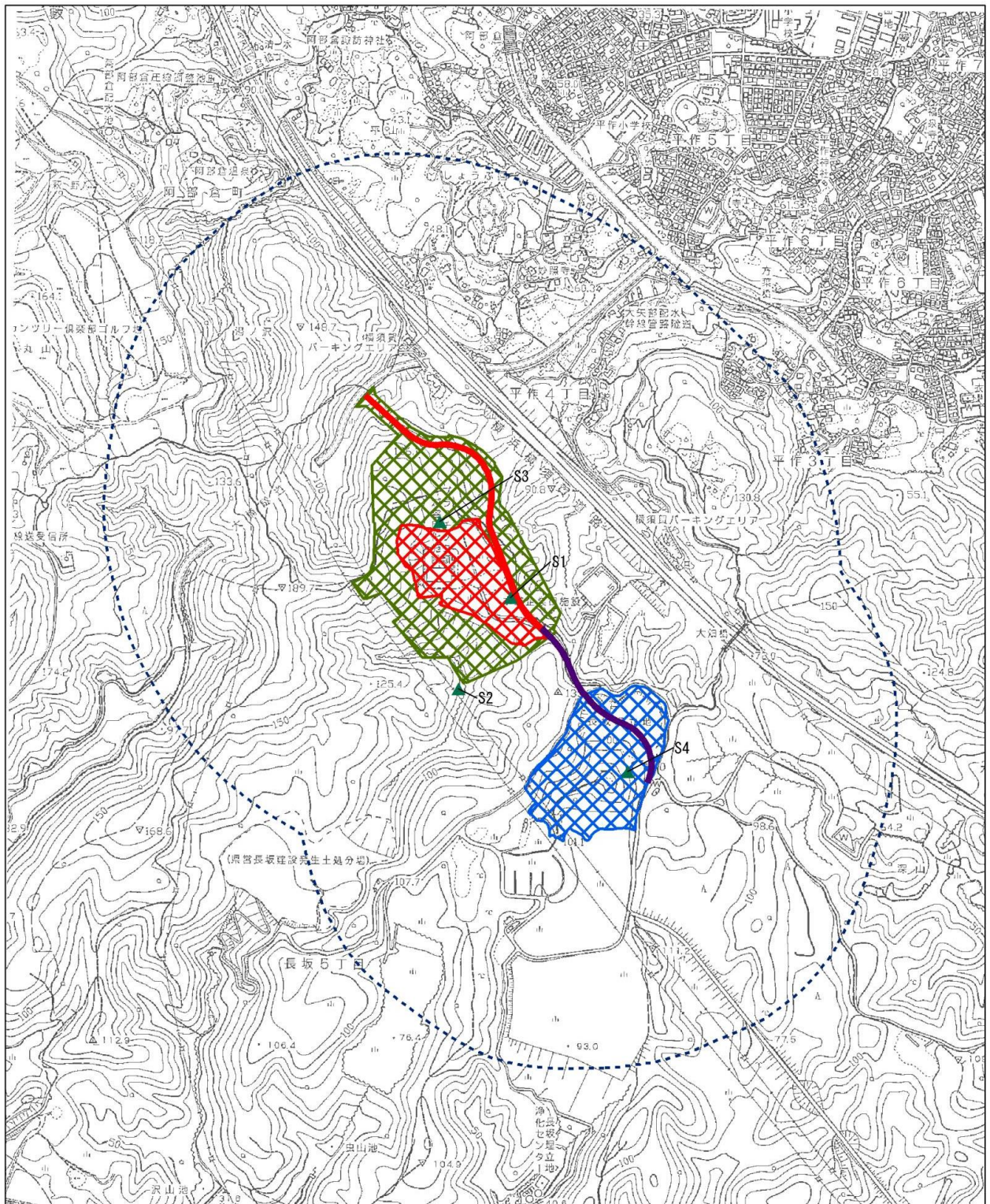
B層はにぶい褐色で、土厚59～70cm、堅密度の値が大きく、絞め固まった土壌であり、構造は堅果状となっていた。土質は半湿で細～小の根茎を含んでいた。








d) S4 (オニシバリーコナラ群集：植生調査地点Q24)

A₀層のうちL層が4cm、FH層が3cmであった。

A層は2層に分かれており、A₁層とA₂層の境界は漸変であった。A₁層は土厚15～25cm、極暗色で腐植を含む土壌であった。土性は埴質壤土で、堅密度の値は小さく柔らかい土壌であった。また、土湿は半湿で細根及び中根を含んでいた。A₂層は土厚17～33cm、黒褐色で腐植を含む土壌であった。土性は埴質壤土で、A₁層よりはやや堅密度の値は大きい柔らかい土壌であった。また、土湿は半湿で細～大の根茎を含んでいた。A層とB層の境界は明瞭であった。

B層は黄褐色で、土厚52～58cm、堅密度の値がやや大きく、絞め固まった土壌であり、構造は塊状となっていた。土質は半湿で細～大の根茎を含んでいた。



凡例		: 廃棄物処理施設 (宅地の造成を含む)		調査位置
		: 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲))		
		: 発生土処分場		
		: 調査範囲		
		: 新設搬入道路		
		: 既設改修道路		
		注) 宅地の造成 (残置森林 (最大範囲)) には、 搬入道路の新設、既設道路の改修に伴い形成される 法面等を含んでいる。		

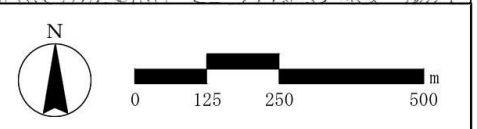


図 5-2-1-10-7 調査地点
(土壌断面調査)

表5-2-1-10-17 土壌断面調査結果

No.	土壌型	層位	厚さ (cm)	下層と の層界	土色	腐植	土性	構造	水湿	緊密度	根系	石礫
S1	褐色 森林土	A ₀	6	L層:1cm、F層+H層:5cm								
		A	15-25	明	黒褐 10YR3/2	含む	埴質壤土	団粒状	半湿	極疎	大あり/中富む/ 細含む	細礫 含む
		B	75-85+	—	にぶい黄橙 10YR6/4	なし	埴土	壁状	半湿	疎	大含む/小含む/ 細含む	なし
S2	褐色 森林土	A ₀	7	L層:5cm、F層+H層:2cm								
		A ₁	20-25	判	黒褐 10YR2/3	含む	埴質壤土	団粒状	半湿	極疎	大含む/中含む/ 小含む/細含む	なし
		A ₂	22-25	漸	暗褐 7.5YR3/3	含む	埴質壤土	塊状	半湿	極疎	小含む	なし
		B ₁	40	明	褐 10YR4/4	なし	埴質壤土	塊状	半湿	疎	中含む/小含む/ 細含む	なし
		B ₂	10+	—	灰黄褐 10YR6/2	なし	壤土	壁状	半湿	中	なし	なし
S3	褐色 森林土	A ₀	9	L層:6cm、F層+H層:3cm								
		A ₁	10-25	漸	黒褐 7.5YR2/2	含む	埴質壤土	団粒状	半湿	極疎	小含む/細含む	なし
		A ₂	5-31	判	暗褐 7.5YR3/3	含む	埴質壤土	団粒状	半湿	疎	大含む/細含む	なし
		B	59-70+	—	褐 7.5YR4/4	なし	埴質壤土	堅果状	半湿	中	小含む/細含む	なし
S4	褐色 森林土	A ₀	7	L層:4cm、F層+H層:3cm								
		A ₁	15-25	漸	極暗褐 7.5YR2/3	含む	埴質壤土	団粒状	半湿	極疎	中含む/細含む	なし
		A ₂	17-33	明	黒褐 7.5YR3/2	含む	埴質壤土	団粒状	半湿	極疎～ 疎	大含む/中含む/ 小含む/細含む	なし
		B	52-58+	画	黄褐 10YR5/6	なし	埴質壤土	塊状	半湿	疎～中	大含む/中含む/ 小含む/細含む	なし

オ 対象事業の計画の状況

ア) 調査事項

造成工事の範囲及び施工方法とした。

イ) 調査範囲

実施区域とした。

ウ) 調査方法

工事計画及び事業計画等の把握により行った。

エ) 調査結果

対象事業の工事計画等の内容は、「別添4-2 2 建設工事等」(P.111)に示すとおりである。

実施区域の敷地面積は、発生土処分場の建設(約7.0ha)、宅地の造成(約16ha、このうち廃棄物処理施設区域 約4.4ha、残置森林 約11.6ha)、関連事業の新設搬入道路(約700m)及び既設改修道路(約450m)である。

なお、新設搬入道路の計画策定は、自然環境の影響を低減するため、一部トンネル化することにより、既存の樹林環境を多く確保し、可能な限り自然環境への影響を低減する。造成に伴う法面については、既存の樹林環境を確保するため傾斜を大きくとる。発生土処分場の跡地については、既設道路等の改修計画以外の場所は森林法に基づき自然林となるよう管理する。